ことぶき「なか」だより
No.187
2018.8

発行所　日本キリスト教団　なか伝道所
〒 231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 203/205
Tel.（045）671-1109
振替　00200 － 1 － 47369　E-Mail : naka-ch@hb.tp1.jp
http://w01.tp1.jp/~ja6694550
発行者　堀江有里　（題字　松橋 順）

宣教方針
① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
② 地域の問題に関わる。
③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会　主日礼拝　日曜日　午前 10 時 30 分より

寿の行事との関わり ―『寿わーく』について

30 周年記念特集 〈「なか伝」を点検する〉第 3 回　発題　沓澤則子さん

寿地区センター主催の「寿わーく」は、なか伝道所も会場にして行われてきました。そこに参加するメンバーもいますが、身近であるのに内容について知らなかったのでは？という反省があり、同じくメンバーの一人で寿地区活動委員として企画に参加されてきた沓澤則子さんからお話を伺うことになりました。

■「寿わーく」ってなあに？

「寿わーく」が始まったのは一九九二年からです。私が関わりだしたのは二〇一〇年頃からなのでまだ八年ほど。今日お話しすることになって、地区センターに残っている大量の資料をお借りしました。立ち上げ当初についてはその資料を参考に、またセンター主事の三森妃佐子さんから「メモ書き」をいただいたのでそれを頼りに、そして私が関わってからのことについては、拙い経験ではありますが、私の体験と記憶からお話したいと思います。

炊き出し

バザーの品物を運ぶ

（写真提供　寿地区センター）

「寿わーく」は、ほぼ年に 3 回のシリーズでフィールドワークを実施していますが、内容はだいたい、①寿というドヤ街の成り立ちや歴史を学んで知ること、②体験をして現在の姿を見て聞いて知ること、そのために炊き出しやバザーへの参加、また作業所やデイケアや訪問介護での体験、アルク・はまかぜ・寿プラザなどの施設見学を盛り込んでいます。また、寿に住む人や路上生活の経験者から話を聞いたり、実際に夜回りをして、路上生活を余儀なくされている人たちと出会います。③最後には「ふりかえり」があり、寿に来て見たこと、知ったこと、感じたこと、考えたことを皆で共有します。

その他、越冬の前にガイダンスを含めて実施したり、「プチわーく」と称して山谷へ見学に行ったり、わかちあいに重点を置いた「しゃべり場」を設定したりと、その年によってプログラムは様々です。

企画は寿地区センターが主となって行いますが、「寿わーく」に参加して「こんなことをやってみたい」と思った人が、次の回から即スタッフになって企画に参加することができます。「寿にいる若い人のことが知りたい」という希望が出た時には、町にある学童保育の指導員の話を聞いて、「寿夏祭り」の中でヨーヨー釣りやかき氷のお店を出したり、缶ぽっくりを作って子どもたちと触れ合うという子どもの行事を企画したこともありました。毎年四月にその年のテーマを決めて、できるだけテーマに沿った内容を企画しています。

■「寿わーく」の歴史

「寿わーく」は今から二六年前の一九九二年に、「寿青年ゼミ」という名前で始まりました。資料によると「寿で聖書を読もう」と題して、聖書の箇所を劇風に役割を決めて読んで感じたことを話し合ったようです。ベースは今と同じですが内容には違いがあり、実施は日曜の午後から月曜日まででした。今から二五年前の寿は、早朝から職を求める労働者が労働センター前に並んでいて、朝、早起

きしての「寄せ場見学」というのもプログラムにありました。

その後、『越冬に参加した学生に寿を知ってもらうためにはきちんとしたオリエンテーションが必要だ』ということになって、年に三～四回実施する今の形が始まりました。当初は「寿を知ろう」ということを目的に体験プログラムが組まれていましたが、体験だけで終わらせるのではなくて、そこで感じたことを振り返ることに重点を置くようになり、そのためにはどんな体験をするのがいいのか？という視点から内容を考えるようになりました。

■若い人たちの参加を

『差別や偏見はふれあうことからしか気づくことはできない。そして、寿の中にある問題は寿だけの問題ではなく、寿の外が作りだした問題であり、それを寿が一生懸命に背負っている』と、三森主事からいただいたメモに書かれています。その認識のもとに、特に将来を担う学生にそのことを考えてもらえるように企画をしてきました。

何とか若い学生の目に留まるようにと、一九九九年のチラシには「やっぱ、越冬でしょ！」、二〇〇〇年は「あなたが来ると桶屋がもうかるぅ？」、二〇〇四年には「踊る大越冬線」の文字が印刷されています。「寿にいつ来るの？　今でしょ！」や「寿ってなんだ！？これだ！」など、流行語大賞から取り入れてキャッチコピーを考えていた時期もありました。

テスト期間は避けて、卒論に響かないように、帰省する前に、夜回りがナイターに重ならないように（横浜スタジアム周辺を回るので）・・・などなど、開催時期も毎回悩むところです。

■ふれあうことから始める

「寿青年ゼミ」の名称については、参加者とスタッフの年齢が高くなったこと、また専門性の高い授業を少人数で行う「ゼミ」という言葉に「違和感」を感じて、二〇一二年に「ことぶき合宿」となりました。けれど他団体が同じ名称を使っていることがわかって、二〇一三年に「寿わーく」と変更して、現在に至っています。開催時期やフィールドワークの内容なども試行錯誤しながらやってきましたが、『一九九二年から現在まで一貫しているのは〝寿にきて、ふれて、考えて〟ということです』。一人でも多くの人が寿に来てそこに住む人々とふれあってほしい。そこで感じたこと、考えたこと、疑問に思ったことをわかちあって、それぞれが生活の現場に持ち帰り、今までとは違う目線で感じたり行動することが出来ればいいと思います。基本は一泊二日ですが、部分参加も可能です。かつて小学生が参加したこともありますから、一人でも多くの人に参加してもらって、寿のことを知ってもらいたいです。

参加者、話をしてくださった方、見学や訪問先でお世話になる方、参加した後でスタッフとして参加する方・・・様々な方が関わって枝が広がり新しい芽が育っています。その根っことして栄養を送ることができるように、「寿わーく」をこれからも柔らかく変化しながら続けていきたいと思います。

（※上記のうち二か所ある『　』内は三森妃佐子さんのメモからの引用です。）

■その後の話し合いから

話を伺った後に、参加者が自由に話し合いました。その中で出たものを簡単に紹介します。

・寿には以前、フィリピンからの出稼ぎ労働者の方が多く滞在していた時期もあったが、今はデイサービスなど介護現場で働く外国人労働者の方が多くいる。その中には、家族を国に残して単身で来日して、子どもを学校に行かせるために働いている人も多い。

・昔は一日分のドヤ代を払うと泊まれたが、今は一週間分を払わないと泊まれなくなり、お金を持たない人には厳しくなっている。

・寿に住む女性が多くなっている。ＤＶを受けた人、出産直前の人など、理由も年齢層もいろいろ。人間関係が苦手だったり、退院したばかりの人もいる。男性と同じフロアーだと怖いという気持ちがあるが、女性専用のフロアーを持っているのは現在２件だけ。経営的には厳しくなるので増えない。

・生活保護受給者にとっては、３年前の住宅扶助金額の見直しが大きく生活を圧迫している。一日二二五〇円計算が一七〇〇円に減額された。ドヤ代を同料金に下げたところもあるが、そのままだと差額を自己負担しないといけない。

（まとめ／渡辺幸子）

風　景

長く礼拝に出席せず、週報棚には多くの週報や他の書類がたまっていました。当然、欠席していた間の教会の動き、お知らせ、個人の消息も後から知るだけです。かつて「せいさん」問題につまずき、未だに教会アレルギーがぬけず、家は遠方でありやっかいな病気もちですが、私に限って言えば、言い訳にすぎません。

なか伝は今、いろいろ話し合いで決めて実行していく試みをはじめていますが私などはお客様的信徒で、牧師や豊かなタラントをもった同じ顔ぶれの仲間たちに任せきりにしてきたため、彼らはいつも責任と労苦を担って、教会の働きを支えてくださってきました。反省しきりです。しかし、礼拝に出席したくてもできない、働きに参加することもできない人を批判できはしません。そこに線引きがなされてしまうという限界を感じます。教会との関わり方は強制ではなく、個人の自主性にゆだねられているからです。

「あいさん」もとらえなおしの学びを継続中です。なか伝の本質を表す「伝統」として長く続けてきましたが、もし続けるとすれば、今のなか伝に集う一人一人が「イエスを中心とした食事」を通して、もれる者なく、しめだされず、新しい日々もイエスの行いにならい、元気に歩いていける幸せを味わえるよう、常に新しい「伝統」を追い求め続ける必要があるのだと思いました。

少ない出席回数で、私自身はなか伝にどう関われるか模索中です。

（袴田交子）

使信

「信仰のみ」の背後で

堀江有里

わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

（ローマの信徒への手紙　一章一六、一七節）

■「主題」としての福音理解

今日、与えられた聖書の箇所は、多くの解釈者たちによって、ロマ書全体の「主題」とされてきた部分です。パウロは、もっとも大事なエッセンスをここで述べているのだと、多くの人びとが解釈してきました。

「わたしは福音を恥としない」。もっと強く述べても良いところなのに、パウロは少し突き放したかたちで、「福音」、つまり、イエスの出来事をとらえようとしています。異邦人への伝道を使徒としての役割だと信じて疑わないパウロ。しかし、苦い経験もあったようです。使徒言行録の示しているところによると、パウロは「キリストの復活」というかれ自身の信仰を主張して、アテナイの人びとに嘲笑されたという経験をもっています（一七章一六節以下）。だからこそ、遠回しな物言いなのかもしれません。

■ルターの「信仰義認」論

聖書の翻訳は、「信仰の書」であるがために、さまざまな制約を受けています。ロマ書のもっとも大切な主題であるとして扱われてきたこの箇所ですが、**新共同訳**の翻訳にも大きな影響を及ぼしている人物がいます。ロマ書をもっとも大事な聖書のひとつとして扱ったマルチン・ルターです。ルターはこの箇所を「信仰義認」の出来事として読みました。一五一七年にカトリック教会が定めていたさまざまな行為、業績を積み重ねることではなく、神を信じることによってのみ「義」――神にとって正しいもの――と認められる。そう述べて、ルターは腐敗した教会に対し、まさに「プロテスト（抵抗）」しました。しかし、その後、農民戦争の弾圧もしているので、かならずしも、ルターが民衆の味方であったとはいえないこともよく知られているところです。免罪符を買ったら、人の罪は許される、などと宣伝していた当時の教会を批判しようとしたルターは、「信仰義認」を強調するためにこの箇所を使いました。そのような使い方を田川建三さんは「改竄的解釈」と呼んでいます（田川建三、二〇〇九、『新約聖書 訳と註 第四巻』作品社、一一一～一一二頁）。

■歴史と出会う

同時に考えたいのは、ルターが「信仰のみ」と主張したことが、その周囲にどのように派生したか、です。

ヨーロッパ各地で宗教改革の波が広がっていくことによって、ローマ・カトリック教会の絶大な権威が地に落ちていったのも十六世紀の出来事です。そんな当時のカトリック教会にとって「救世主」となったのは、いわゆる「新大陸」でした。アメリカ大陸です。奇しくもそのことを象徴するかのように、コロンブスはアメリカ大陸で最初に「発見」した島に、サン・サルバドール＝救世主と命名したのでした。

メキシコのマオ民族の村をおとずれ、四〇年間にわたり、関係性をつくってきた清水透さんという歴史学者はつぎのように述べています。

過去の史実から何を感じとり、何を考えるか。新たな史実と出逢って、ハッとする自分を発見する。これこそが重要なのです。こうして初めて、歴史を知ることの楽しさに出逢うことができると思うのです。そうでない限り、歴史は自分とは無関係な昔の出来事、別世界の話に留まりつづけ、限られた自分の体験や、知らぬ間に自分に巣くってしまっている

大人のえーとねえ

お部屋が片付かないと嘆いているMさん
大きなお菓子の空箱を見つけて…

M「これ！ほしい！ちょうだい！」
R「何に使うんですか？」
M「可愛いからよ！」
R「…だから、片付かないんですよー」

上杉理絵

常識的な知識や価値観を見直す貴重な切っ掛けを見失うこととなる（清水透、二〇一七『ラテンアメリカ五〇〇年――歴史のトルソー』岩波現代文庫、三頁）。

当時のカトリック教会が植民地主義に加担していく様子は、遠い出来事ではなく、日本の生活にも影響を及ぼしている、とも述べられています。地球的な規模で「中心」を拡大していき、支配領域を広げていく。西欧のキリスト教を絶対的なものとして位置づけ、それ以外を「野蛮」と名づけていく。その絶対的な「中心」は外側へと広げる方向のみならず、国家の領域内部での差異化、周縁化をつくっていきます。周縁化し、差別することによって「他者」をつくる。同時に「他者」との境界線を確認することによって支配者のアイデンティティはかたちづくられていく。支配者は、周縁化された人びとを徹底的に利用していくわけです。

「明治」を迎えた日本もそうでした。日本は近代化のためにヨーロッパの真似をしようとします。キリスト教にとってかわって神道を置き、天皇制を確立していく。そして、小笠原諸島の領有化（一八七六年）、琉球処分（一八七九年）、台湾領有（一八九五年）、朝鮮（大韓帝国）併合（一九一〇年）へと拡大路線をとっていきます。

とても興味深いのは、メキシコの歴史を研究している清水さんが、日本の歴史と結びつけ、流れを辿り、想像力を豊かにしてくれることです。

ルターの「改竄的解釈」に影響を受けた聖書は、いまもわたしたちの手元に「信仰」の大切なあかしとして、在りつづけています。しかし、解釈がほどこされてきた経緯を踏まえようとするとき、わたしたちが問われていることは何でしょうか。負の歴史を忘却し、「ハッとする自分を発見する」きっかけを失ってしまった、わたしたちの「信仰」なのではないでしょうか。そんなことを今日の聖書箇所、そして読まれてきた歴史から教えられます。

まど

▼個々人がさまざまにたずさわっていても、寿地区の活動と教会の宣教はかならずしもつながっているとはいえない現状があります。このたび、沓澤さんに「現場」からの声を届けていただけたのはとても有意義な時間でした。感謝です。

▼なか伝道所では礼拝後、食事の前に「愛餐式」という名称でパンとぶどう汁のわかちあいがなされてきました。袴田さんが「風景」でも言及されていますが、三月の伝道所総会での総意により、四月からいったん実施をとめて話し合いを継続してきました。正確な意味での「聖餐式」ではないものの、牧師招聘の際に渡辺英俊牧師が求められたのは「正教師」資格者でした。教師試験受験を拒否してきた先輩たち、「補教師」という立場にとどまる友人たちや先輩たちのことを、毎週、執行のたびに思い起こす一年間でした。自分の位置を問われ続ける思いです。同時に、このような「儀式」をめぐってはさまざまな立場や意見があり、折り合いはつかないのが現状です。必要な人たちには必要だ、という暫定的な結論に至り、八月より再開します。

▼「Go, go, go in peace. Be strong! Mysterious Hand guide you!」（新島襄、一八七九年六月十二日）。教会に奉職せんとする「献身者」たる者、己を低く、虚しくし、すべてを神の御手に委ねることが何よりも求められているのかもしれません。引き続き、なか伝道所のために、ご加祷、そしてお支えいただけますと幸甚です。よろしくお願いいたします。

（堀江有里）

2017年度支援会会計報告

	[単位：円]
（収入の部）	
支援献金	502,000
クリスマス献金	288,900
利子	0
前年度繰越金	14,450
合計	805,350
（支出の部）	
振込み負担金	9,100
通常会計へ	779,100
次年度へ繰越	17,150
合計	805,350

なか伝道所支援献金のお願い

皆様からご支援をいただき、伝道所の活動が大変助かっています。心より感謝いたしますと共に、ここに前年度の報告をいたします。

今年度も今まで同様、皆様のお祈りと支援献金へのご協力をお願いいたします。

編集後記

いままで気軽に参加していた「寿わーく」。沓澤さんのお話しを聞き、主催している方々のご苦労を知ることができました。「若い人々に寿のことを知ってほしい」という熱意に自分自身を反省です。12日から始まる寿夏祭での出会いを大切にしたいと思います。いまニュースで流れている西日本豪雨のあまりの被害の大きさ…一日も早い復興を祈らずにはいられません（幸子）